

King Richard II における特異性

Peculiarities in *King Richard II*

山畑 淳子

YAMAHATA Atsuko

King Richard II is a sophisticated but peculiar play and has complicated elements. It is generally agreed by Shakespearean scholars that *King Richard II* was published first in 1597; however, the deposition scene possesses several problems and was deleted from the early printed quartos. The play had some political implications and was performed on the day before Essex's rebellion. This drama progresses through debate and talk rather than action. Besides these political and theatrical circumstances, the work includes ceremonial formalities, emblematic imagery, a contrast of two kings, and legal terminology. These elements can be found in Shakespeare's later plays.

The purpose of this paper is to consider *King Richard II* by looking carefully into the play and its theatrical environment. Through a careful examination of the structure and by an analysis of the imagery, this paper argues the meaning and the position of this peculiar work in the long flow of Shakespeare's dramaturgy.

I

King Richard II は、Richard 2世の王位篡奪に関わる中核をなす部分が版本により削除されただけでなく、Essex 伯の反乱前夜に上演されたこともあり、政治とかかわりのある、多くの点で特異な劇であり、台詞も植物や庭、四元素や貨幣経済のイメージラリー、法律用語やその縁語が使われている。M. C. Bradbrook も「庭を踏みつけるイメージが劇全体を通して一貫して流れていて、それは庭師による描写の場面で具現化されている」と述べている。¹ S. Schoenbaum も、

この作品は、王権、王の墮落、国運といった大きなテーマを喚起すると示唆している。² また、Richard 2世自身、中世的価値観を持ち、William 征服王からの直系の後継者でプランタジネット朝最後の王であり、神の代理人である聖油を塗られた王を、いくら政治的手腕がないからとは言え、理知的な Bullingbrook が廃し、国王弑逆に及んでもよいのかという Carlisle 司教の主張する弁論的命題や、国王の矮小化の問題も含み、こうした政治的観点に、登場人物の人生観と演劇論的要素がプロットの進展に沿って高度に取り入れられた洗練された劇となっている。³ さらに、この芝居自体、*Hamlet* や *Macbeth* などの Shakespeare の後期の作品につながっていくと考えられる儀礼、予言や鏡の手法、弁論や語りを通して筋が進展していき、言葉と意味が分離していくアイロニカルでひねった視点が提供されている。

本稿では *King Richard II* における特異な点について考察し、これらの要素がどのような意味を持つのかを、作品の構造とイメージ、演劇的環境から探り、それが Shakespeare の長い劇作術の中でどのような意味と位置づけを持つ劇であるのかを考えてゆきたい。

II

まず、この作品の特色とも言える、形式と弁論を重視した第1幕第1場の Henry Bullingbrook と Norfolk 公 Thomas Mowbray の決闘をめぐる討論の場からそれぞれの登場人物の性格も含めて考察してみよう。劇の幕開きから次のように、Richard 2世の “Then call them to our presence. Face to face / And frowning brow to brow ourselves will hear / The accuser and the accused freely speak.” (1. 1. 15-17) という要請により、宿敵の Bullingbrook と Mowbray が王 Richard の前に呼び出され、それぞれの主張の黒白を明らかにするために、いきなり激しい討論がふたりの間で始まる。⁴

BULLINGBROOK First, heaven be the record to my speech.

In the devotion of a subject's love,
Tendering the precious safety of my prince,
And free from other misbegotten hate,
Come I appellant to this princely presence.
Now Thomas Mowbray do I turn to thee,
And mark my greeting well; for what I speak
My body shall make good upon this earth,
Or my divine soul answer it in heaven.

Thou are a traitor and a miscreant,
Too good to be so, and too bad to live.
Since the more fair and crystal is the sky,
The uglier seem the clouds that in it fly.
Once more, the more to aggravate the note,
With a foul traitor's name stuff I thy throat,
And wish (so please my sovereign) ere I move,
What my tongue speaks my right drawn sword may prove.

MOWBRAY Let not my cold words here accuse my zeal.

'Tis not the trial of a woman's war,
The bitter clamour of two eager tongues,
Can arbitrate this cause betwixt us twain.
The blood is hot that must be cooled for this.
You can I not of such tame patience boast
As to be hushed, and naught at all to say.
First, the fair reverence of your highness curbs me
From giving reins and spurs to me free speech,
Which else would post until it had returned
These terms of treason doubled down his throat.
Setting aside his high blood's royalty,
And let him be no kinsman to my liege,
I do defy him, and I spit at him,
Call him a slanderous coward and a villain,
Which to maintain I would allow him odds
And meet him were I tied to run afoot
Even to the frozen ridges of the Alps,
Or any over ground inhabitable
Where ever Englishman durst set his foot.
Meantime, let this defend my loyalty:
By all my hopes most falsely doth he lie. (1. 1. 30-68)

この敵対するふたりの討論に関しては、Richard が、“High stomached are they both and full of ire, / In rage deaf as the sea, hasty as fire.” (1. 1. 18-19) と述べているように、「荒海」、「烈火」として、はやりたけり狂う心象で、海であっても、激しい火のイメージでとらえられている。劇の前半において、Bullingbrook は概して、「水」、「洪水」、「火」のイメージでとらえられることが多く、この箇所でも、人の言うことなど聞かない荒れ狂う海のイメージが強調されている。Robert Ornstein もこの作品における精巧な比喩表現は、地、水、風、火の天動説の基本要素で

構成された形而上の光景として、エンブレムと観念の世界を具現化するより哲学的なもので、理論上階層制の序列を上り、それぞれふさわしい場所を占めるものとしている。⁵ **Richard**はこのふたりに対して、劇の幕開けから傲慢な上に血気盛んで怒り狂っている異議申立人とみなしており、このふたりに対する侮蔑した態度が読み取れる。引用箇所、**Bullingbrook** は、彼の主張は、地上においては自分の肉体をもって立証し、天上においては靈魂が責任を取ると述べ、大空が美しく澄みわたり、そこに漂う雲はいつそう醜く見えるものだから、**Mowbray** が謀反人であることを、王の許しが下れば、剣で立証してみせると言い放ち、彼の上昇傾向を印象づけている。この箇所でも四元素についてのイメジャリーが使われており、地上では、肉体としての聖書の解釈より土、天上においては空気のように軽やかな魂がそれに応えるという空気のイメジャリーが使われている。そして、天上の大空が澄みわたる中での悪事が雲として露出するさまを立証すると述べているが、この発想とイメジャリーは、後期の劇 *Macbeth* の第2幕第4場で **Rosse** と老人が **Duncan** 殺害の前夜の天候や動物界の異変を、昼なのに光ではなく暗闇が大地の面を埋葬し、空を舞っていた鷹がフクロウに襲撃されて殺され、**Duncan** の名馬中の名馬が厩を破って飛び出し共食いしたことを語るイメジャリーと類似し、大宇宙と小宇宙である人間界との照応が提示され、そこに血なまぐさい地上の舞台があることを比喩表現で示している。⁶

一方、**Mowbray** は、「冷静な言葉ゆえに、私の熱意を疑うことなきよう」と述べ、言葉（風）と熱意（火）を対照させ、いずれかの熱い血が冷たくされるほかはないと言い放っている。**Richard** に対する恐れ敬う心が、言葉に手綱をかけるので、それがなければ、2倍の勢いで謀反人という言葉が彼の喉もとへ送り返していたはずと述べている。この台詞により、**Richard** と **Mowbray** の間に親密な主従の関係があることを暗に示唆している。この作品の中には、倍数や貨幣のイメージが現されているが、ここでも倍数の比喩が使われている。**Mowbray** は、冷静な言葉によって、自分の血気が抑えられてはいるものの、熱い思いがあることを連想させるべく、**Bullingbrook** の血統を口にし、自分の主張が正しいことを立証するために、いかなる不利な条件もいとわないと述べ、**Bullingbrook** によって押し付けられた雲のイメージをもっときれいな雪にすり替え、土のイメージとしては、未開の土地まで、徒歩で追って走って行けと言われても、喜んで出向いて行き、剣を取って立ち会うと豪語しているが、後に永久にイギリスから追放され、皮肉にもそのとおりになってしまう。後程述べていくが、この作品の特異性のひとつとして、このようなアイロニカルな視点が提供されていることが、挙げられる。**Mowbray** は、以上のように宣言し、忠誠の保証とし、**Bullingbrook** の申し立てはことごとく嘘であると述べている。

Bullingbrook は挑戦のしるしである手袋を投げ捨て、あらゆる騎士道のしきたりに従って決闘

し、剣と剣によって、正しい主張をみごと立証してくれようと述べる。Mowbray は跪き、手袋を拾って、この挑戦を受けようとする。跪く儀式重視の形式主義も、この劇の特色である。Ornstein も *Richard II* の儀式は上流階層の儀礼を演劇化しており、詩歌は精巧なバランス、シメトリ、頭韻の中に序列のある修辞を響かせているとして、そのテーマ的なイメージはこうした世界のものについて言及し、自然と人間の行動についての視覚と音に訴えるとしている。⁷

そこへ、Richard が Bullingbrook に Mowbray の罪過を問いただす。これに対して、Bullingbrook は、Mowbray が王の兵士に分かつ貸出金の名目での金貨の不正使用したことと併せて、次のように Mowbray の罪過の核心にふれていく。

Further I say, and further will maintain
Upon his bad life to make all this good,
That he did plot the Duke of Gloucester's death,
Suggest his soon-believing adversaries,
And consequently like a traitor coward
Sluiced out his innocent soul through streams of blood,
Which blood, like sacrificing Abel's, cries
Even from the tongueless caverns of the earth
To me for justice and rough chastisement;
And, by the glorious worth of my descent,
This arm shall do it, or this life be spent. (1. 1. 98-108)

Bullingbrook は Mowbray が Bullingbrook の叔父 Gloucester 公の暗殺をはかり、公に敵する者たちの信じやすさに乗じてそそのかし、ついには、公の罪なき魂を処刑により血の河に流し失せしめた卑劣極まる反逆行為について告発する。この箇所でも、魂、血の河など四元素の比喩が用いられている。さらに、Gloucester 公の血は、神に訴えた Abel の血のように、物言わぬ大地の墓穴（地）の底から正義の裁きときびしい懲罰を求めて叫んでいると述べ、ここにも、中世の体液のイメージと四元素の比喩が用いられ、彼の血気と家門の名誉にかけて、その叫びに応じると勇ましく復讐を断言している。これに対して、Richard は “How high a pitch his resolution soars!” (1. 1. 109) と、Bullingbrook の言葉に野心を感じて嫌味を言っている。“pitch” (1. 109) は鷹狩において、鷹が獲物を襲う前に舞い上がる高さのことであるが、白鷹は Bullingbrook のエンブレムであり、鷹の舞い上がる高さとは Bullingbrook の白鷹の舞い上がる風、それに白鷹の獲物に襲いかかる野心の高さがかけられていて冷笑的な台詞となっている。⁸ また、ここで用いられている元素のうち、風は上昇志向の高いものであり、Bullingbrook の上昇志向の高さと気の

強さを Richard は直感的に感じて、これを揶揄している。

両異議申立人とも、それぞれの罪過を決着つけるべく、決闘の日取りを願い出ると、Richard は自分の言葉を聞いて、怒りの炎を静めてほしいと願うのであるが、ここにも風と火の四元素のイメージが使われている。Mowbray は名誉を汚すことはたとえ王の命令でもできないと拒むが王は “Rage must be withstood. / Give me his gage. Lions make leopards tame.” (1. 1. 173-74) と、説得する。この箇所に現れるエンブレムのライオンは、イギリス王の紋章に使われ、豹は一般的に Norfolk の紋章と解されているが、Norfolk 公の紋章は実は銀のライオンである。⁹ Shakespeare はプロットの進展からこの場合は豹を使っているが、それは一体なぜだろうか。王の紋章と同じライオンが貴族の紋章に使われえた事情と、当時の一部の人々はこうしたことを知っていたことも考慮すると、このあたりにも、Richard 2世の王権の脆弱さへの複雑なアイロニーが含まれていると言えよう。これに対して、Mowbray は次のように主張する。

MOWBRAY Yea, but not change his spots. Take but my shame
 And I resign my gage. My dear, dear lord,
 The purest treasure mortal times afford
 Is spotless reputation; that away,
 Men are but gilded loam, or painted clay. (1. 1. 175-79)

プロットが進むにつれて、台詞の端々から Richard と Mowbray が Gloucester 殺しに関与している様子が明らかになってくる。Mowbray は豹の斑点は消えないとアレゴリカルに訴え Richard に汚名を消してほしいと嘆願している。そうすれば、彼が今持っている Bullingbrook の質である手袋を捨てて試合をあきらめると述べていて、意味深長な台詞となっている。名誉は彼の命であり、名声を失えば、人間も金粉を塗った粘土細工にすぎないと言っており、ここでも四元素のひとつである土のイメージが使われている。Richard は “We are not born to sue, but to command,” (1. 1. 196) と言い、両人とも聖ランバートの祝日にコヴェントリーへ出頭し、剣と槍をもって騎士道にのっとり勝負で、それぞれの主張の正邪を決することとなるが、Richard の後半の運命を考えると、アイロニカルな台詞となっている。

第1幕第3場では、コヴェントリーの試合場に対決するふたりの騎士が武具をつけて、入場を待ちかねている。そこへ、Richard が Gaunt その他取り巻きの貴族たちを引き連れて登場し、一同着席すると、被告 Mowbray が伝令官とともに登場し、王の命令により、次の手順で口上が述べられる。

MARSHAL In God's name and the king's say who thou art,
And why thou com'st thus knightly clad in arms,
Against what man thou comest and what thy quarrel.
Speak truly on thy knighthood and thy oath,
And so defend thee heaven and thy valour.

MOWBRAY My name is Thomas Mowbray, Duke of Norfolk,
Who hither come engagèd by oath
(Which God defend a knight should violate)
Both to defend my loyalty and truth
To God, my king, and my succeeding issue,
Against the Duke of Herford that appeals me,
And by the grace of God, and this mine arm,
To prove him, in defending of myself,
A traitor to my God, my king, and me.
And as I truly fight, defend me heaven. (1. 3. 11-25)

Norfolk 公爵 Thomas Mowbray は、ひとつには、彼を告訴する Herford 公爵と対決して、神に対し、王に対し、彼の子孫に対する、彼の忠誠と真実を守らんがため、ひとつには Herford が裏切り者であることを立証せんがため、この場に武装して現れたことを誓約している。Mowbray は、Richard に対する忠誠と、子孫に対する名誉に重きをおいて、彼の中では、今までの台詞から、神に対する忠誠と王に対する忠誠は、同等の重みを持っていると言えよう。

次にトランペットの吹奏があり、原告 Bullingbrook が武装して伝令とともに登場し、王の命令により、形式通り、その訴えの正しいことを宣誓させられる。

BULLINGBROOK Harry of Herford, Lancaster and Derby
Am I, who ready here do stand in arms
To prove by God's grace and my body's valour
In lists, on Thomas Mowbray, Duke of Norfolk,
That he's a traitor foul and dangerous
To God of heaven, King Richard and to me;
And as I truly fight, defend me heaven. (1. 3. 35-41)

Bullingbrook は Herford、Lancaster、ならびに Derby 公爵 Harry は、神の恩寵と自らの武勇により、当試合場において、Norfolk 公爵 Thomas Mowbray こそ、天なる神に対し、Richard 王に対し、Bullingbrook に対する危険邪悪な裏切り者であることを立証せんがため、武装してこの場に現れたことを誓う。プロットが進むにつれ、Richard と Mowbray が Gloucester 殺しに関

わっていることは次第に明らかになってくるため、形式的な口上であるとは言え、Mowbrayが Gloucester 暗殺の首謀者として、神と Richard に対して邪悪な反逆者であることを立証するというのは、かなり諷刺的な表現で、アイロニカルな視点を提供している。Richard としても、内心穏やかではないはずだ。Bullingbrook は王の御前に跪き、陛下の御手に口づけして暇乞いをしたいと願い出て、Bullingbrook は Richard や身内、友人とも、次のように対話する。

RICHARD We will descend and fold him in our arms.
Cousin of Herford, as thy cause is right
So be thy fortune in this royal fight.
Farewell, my blood, which if today thou shed
Lament we may, but not revenge the dead.

BULLINGBROOK Oh, let no noble eye profane a tear
For me, if I be gored with Mowbray's spear.
As confident as is the falcon's flight
Against a bird do I with Mowbray fight.
My loving lord, I take my leave of you.
Of you, my noble cousin, Lord Aumerle,
Not sick, although I have to do with death,
But lusty, young and cheerly drawing breath.
Lo, as at English feasts so I regret
The daintiest last, to make the end most sweet.
Oh thou, the earthly author of my blood,
Whose youthful spirit in me regenerate
Doth with a twofold vigour lift me up
To reach at victory above my head,
Add proof unto mine armour with thy prayers,
And with thy blessings steel my lance's point
That it may enter Mowbray's waxen coat,
And furbish new the name of John a Gaunt
Even in the lusty haviour of his son. (1. 3. 54-77)

この箇所でも、血が流されるイメージが使われ、Richard は、さらば、わが血よ、と述べ、その血が流されようと、復讐することはできないと冷たい対応をしている。これに対して Bullingbrook は自らのエンブレムの鷹のイメージを用いて、強さを強調し、自信をうかがわせている。さらに、Aumerle に対しても、若さと元気に流れる息吹を強調している。Gaunt に対しては、父の若き日の精神がよみがえり、二重の勇気をもって私を励まし、この頭上に勝利の栄

冠を勝ち取らせてくれると予測し、John a Gaunt の英名を、新たに息子の武勇によって輝かせることができるようにと祈っている。こうした台詞はプロットの先見性を確立するものであり、ここにも倍数の比喩が有効に使われている。

これに対して、父親の Gaunt は次のように祈りつつ、息子に助言を与えている。

GAUNT God in thy good cause make thee prosperous.
Be swift like lightning in the execution
And let thy blows, doubly redoubled,
Fall like amazing thunder on the casque
Of thy adverse pernicious enemy.
Rouse up thy youthful blood, be valiant and live. (1. 3. 78-83)

Gaunt は決闘に際しては、すみやかなること稲妻のごとく、猛きこと雷のごとく、宿敵の胄を打って打って打ちのめすよう指南をしている。稲妻は火と風の元素からなるイメージとして使われ、Gaunt は若い血を湧き立たせ、勇敢に戦って生き延びるように助言をしているが、血もまた、古生理学の体液のイメージであり、こうした祈りの言葉がプロットの枠をつくる効果をしている。これに対して、Mowbray は、“However God or Fortune cast my lot / There lives or dies, true to King Richard’s throne, / A loyal, just and upright gentleman.” (1. 3. 85-87) と述べ、Richard に対し忠義廉直の臣下であることを強調し、Mowbray の正義と立場は、常に王と強く結び付いていることを印象づけている。これに対して、Richard は“Farewell, my lord. Securely I espy / Virtue with valour couchèd in thine eye.” (1. 3. 97-98) と Mowbray へは優しい言葉をかけ、Bullingbrook への対応とは対照をなしている。

式部卿より槍が Bullingbrook と Mowbray へ渡される。Mowbray が“*And when I mount, alive may I not light / If I be traitor or unjustly fight.*” (1. 1. 82-83) と以前に述べていたように、馬上槍試合が今にも開始されようとしているのであるが、この Mowbray の台詞もまた、Gloucester 暗殺の伏線からみると、意味深長な台詞である。伝令官より決闘開始の合図の知らせを受け、式部官の開始のラッパが鳴ったところで、急に Richard が職杖を投じて、決闘の中止が告げられる。Richard と諸侯との協議の末、彼らがもどるまで、両名は待たされ、協議の結果が次のように、Richard より告げられる。

For that our kingdom’s earth should not be soiled
With that dear blood which it hath fosterèd,
And for our eyes do hate the dire aspect

Of civil wounds ploughed up with neighbour's sword,
And for we think the eagle-wingèd pride
Of sky-aspiring and ambitious thoughts
With rival-hating envy set on you
To wake our peace, which in our country's cradle
Draws the sweet infant breath of gentle sleep,
Which so roused up with boisterous untuned drums,
With harsh resounding trumpet's dreadful bray
And grating shock of wrathful iron arms,
Might from our quiet confines fright fair peace,
And make us wade even in our kindred's blood,
Therefore we banish you our territories. (1. 3. 125-39)

この引用箇所でも、血、鷲、天、血潮の河などの四元素や体液のイメージがみごとに織り込まれ、Richard の主張の助けとなっているが、詭弁であるとも言えよう。王国の土は、みずからはぐみ育てた大切な血でもって汚されるべきではなく、同胞の剣をもって同胞の肉を切り刻むがごとき無残な光景は、見るに忍びがたい。両人は傲慢不遜な野心と嫉妬羨望の悪意にそそのかされて、平和を目覚めさせ、鋼鉄の刃で美しい平和が我が国を逃れ去ることがあれば、我らは同胞の血潮の河をわたることになるゆえ、両人を国外追放にすることにするという宣告である。協議の結果により、Bullingbrook は10年の国外追放、Mowbray は永久に国外追放となる旨が告げられる。これを受けて、Mowbray は、次のように王に訴える。

MOWBRAY A heavy sentence, my most sovereign liege,
And all unlooked for from your highness' mouth.
A dearer merit, not so deep a maim
As to be cast forth in the common air,
Have I deserved at your highness' hands.
The language I have learnt these forty years,
My native English, now I must forgo,
And my tongue's use is to me no more
Than an unstringèd viol or a harp,
Or like a cunning instrument cased up,
Or being open, put into his hands
That knows no touch to tune the harmony.
Within my mouth you have engaoled my tongue,
Doubly portcullised with my teeth and lips,
And dull unfeeling barren ignorance

Is made my gaoler to attend on me.
I am too old to fawn upon a nurse,
Too far in years to be a pupil now.
What is thy sentence then but speechless death,
Which robs my tongue from breathing native breath? (1. 3. 154-73)

Mowbray は永久にイギリスから追放されることで、40年間学んできた言葉、イギリスの国語を捨てることのつらさと、王から恩賞を受けるに値するのに、国外追放になった痛手を恨みがまし、口にする。この台詞により、王との間に Gloucester 殺しに関連がある含みが示されている。さらに、いまさら言葉を覚えるのがつらい年齢ということもあり、母国語を奪われる今回の決定を「母国語を吐く息を奪われたのだから」として、「無言の死の宣告」と捉えている。この個所にも空気(風)という四元素のイメージャリーが使われている。これに対して、Richard は “It boots thee not to be compassionate. / After our sentence plaining comes too late.” (1. 3. 174-75) と言い放ち、これに応じて、Mowbray は “Then thus I turn me from my country’s light / To dwell in solemn shades of endless night.” (1. 3. 176-77) と述べている。言葉を奪われ、苦情も聴いてもらえない Mowbray は Macbeth が無間地獄に落ちていったように、光ある世界からはてしない無明の暗闇に住まいを求めていくことになり、劇の後半で Norfolk の死が語られる。王は自分に対する義務は解放するとしながらも、兩人とも追放中に会合して Richard に対して陰謀をたくらみ、はかつてはいけなしいとして、ふたりに誓約させる。Bullingbrook はイギリスを去る前に Mowbray に謀反を告白するようにたずねるが、ここにも、Bullingbrook の粘着質で伶俐なしたたかさが表れている。Mowbray は王の前ということもあり、これを否定し、“But what thou art, God, thou and I do know, / And all to soon, I fear, the king shall rue.” (1. 3. 203-04) と予言して、プロットの先見性を示している。Mowbray が去ると、Richard は気が楽になったのか、Gaunt の悲嘆にくれる姿を見て、Bullingbrook の追放年限を10年から6年に引き下げ、彼の政治的無能ぶりを示し、Bullingbrook に王の言葉とはいかなるものかを、王権とは何かを悟らせてしまい、彼の心に火をつけてしまう。第1幕第3場の終わりで、Bullingbrook は、次のように述べている。

BULLINGBROOK Then England’s ground farewell, sweet soil adieu,
My mother and my nurse that bears me yet.
Where’er I wander, boast of this I can,
Though banished, yet a true born Englishman. (1. 3. 305-07)

この個所でも地のイメージが使われているが、Bullingbrookは地を、自分をおぶってくれる母、乳母のイメージで捉えている。Mowbrayが追放をはてしない無明の暗闇に住まうことと捉えていたのとは対照的に、Bullingbrookは“England’s ground”、“sweet soil”と呼びかけ、追放の身でどこをさまようとも、大地の上に足をしっかりと踏み下ろし、真のイギリス人であることの誇りを意識している。息子を送りだす Gaunt は、さながら Polonius が旅に出る Laertes に諭すように、次のように言葉をかけている。

GAUNT All places that the eye of heaven visits
Are to a wise man ports and happy havens.
Teach thy necessity to reason thus:
There is no virtue like necessity.
Think not the king did banish thee,
But thou the king. . . . (1. 3. 274-79)

“the eye of heaven” (1. 274) とは太陽のことであるが、Gaunt は Bullingbrook の追放を、天日、賢者、良き港、幸せな安息所のイメージで捉え、艱難汝を玉にす、との教えとともに、こうした言葉を息子に送っている。王が Bullingbrook を追放したのではなく、彼が王を追放したのだと思うようにと諫め、はなむけの言葉を贈っているが、この言葉はプロットの先見性を示し、芝居の枠を作り、アイロニカルな視点を提供している。これとは対照的に、馬上槍試合における Richard の儀式だけを重んじ、試合開始のラッパが鳴った途端、職杖を投じて中断させる充足感のなさは、Richard の政における無能さと、裏にある Gloucester 殺しの暴露される不安を内包している。

III

実際の騎士道にのっとり馬上槍試合に及ぶ前に、John of Gaunt が Gloucester 公爵夫人と Gloucester 殺しについて対話する場面があり、その対話が芝居の枠に大きな貢献をしていると考えられるため、この場も見ていくことにする。Gloucester 公爵夫人は次のように言って、兄の Gaunt に復讐を促している。

DUCHESS Finds brotherhood in thee no sharper spur?
Hath love in thy old blood no living fire?
Edward’s seven sons, whereof thyself art one,

Were as seven vials of his sacred blood,
Or seven fair branches springing from one root.
Some of those seven are dried by nature's course,
Some of those branches by Destinies cut,
But Thomas, my dear lord, my life, My Gloucester,
One vial full of Edward's sacred blood,
One flourishing branch of his most royal root,
Is cracked, and all the precious liquor spilt,
Is hacked down, and his summer leaves all faded,
By envy's hand, and murder's bloody axe.
.
In suffering thus thy brother to be slaughtered
Thou showest the naked pathway to thy life,
Teaching stern murder how to butcher thee.
That which in mean men we entitle patience
Is pale cold cowardice in noble breasts.
What shall I say? To safeguard thine own life
The best way is to venge my Gloucester's death. (I. 2. 8-36)

Gloucester 公爵夫人も、火や血などの四元素や古生理学の体液のイメージャリーを使い、復讐の思いに火をつけようとしている。王の血統については、王の神聖な血をたたえた7つの瓶や、ひとつの根から生まれ育った7本の枝のイメージャリーで捉えられている。王族の血筋は植物の比喩で表現され、この個所でも、Gloucester 暗殺が残忍な斧によって切り倒され、夏のさかりの緑葉もことごとく枯れ果てたと表現されている。Gloucester の兄である Gaunt は夫人の比喩に心動かされながらも、次のように夫人を説得している。

GAUNT God's is the quarrel, for God's substitute,
His deputy anointed in His sight,
Hath caused his death, the which if wrongfully
Let heaven revenge, for I may never lift
An angry arm against His minister.
DUCHESS Where then, alas, may I complain myself?
GAUNT To God, the widow's champion and defence. (1. 2. 37-43)

Gaunt と Gloucester 夫人の会話から、Gloucester 暗殺に Richard が関与していることが明らかになってくるのであるが、当時は王が神の代理であると考えられていたため、祭壇の前で聖油を塗られて即位した神の代理人が、Gloucester に死をもたらし、それが不正であれば、天が復讐

してくださると Gaunt は考えている。Gaunt はそのため、神の代理人に怒りの腕をふりあげることはできないとしている。Gaunt はさらに、“Put we our quarrel to the will of heaven, / Who when they see the hours ripe on earth / Will rain hot vengeance on offenders’ heads.” (1. 2. 6-8) と述べており、Gaunt の予言するように、時が熟して Richard の上に神の制裁の雨がふりそそぐ芝居の構造はすでに劇の始めで出来ていて、Richard の愚行に対して、諷刺的な視点を提供している。なお、雨や洪水は Bullingbrook の気質をあらわす元素として、しばしば劇のプロットの中で多用されている。

Gaunt の予言あるいは弁論として、注目すべきなのは、彼が亡くなる前に述べる台詞である。第2幕第1場で、Gaunt は、Richard に苦言を呈し、諫める心づもりでいて、その根拠を次のように述べている。

GAUNT Methinks I am a prophet new inspired,
And thus expiring do foretell of him.
His rash fierce blaze of riot cannot last,
For violent fires soon burn out themselves.
Small showers last long but sudden storms are short.
He tires betimes that spurs too fat betimes.
With eager feeding food doth choke the feeder.
Light vanity, insatiate cormorant,
Consuming means, soon preys upon itself.
.
England, bound in with the triumphant sea
Whose rocky shore beats back the envious siege
Of watery Neptune, is now bound in with shame,
With inky blots and rotten parchment bonds,
That England that was wont to conquer others
Hath made a shameful conquest of itself.
Ah, would the scandal vanish with my life,
How happy then were my ensuing death! (2. 1. 31-68)

Gaunt は今際の際に、王 Richard の運命を予示する。Gaunt は自らを、新たに靈感を得た予言者のような心地と述べており、苦悩に満ちた Gaunt の苦言は、神聖化され、神に近いものとして表されている。Gaunt は Richard の血気にはやる放埒の炎は長続きするものではなく、激しく燃えあがる火はたちまち燃え尽きてしまうとみなしている。小雨はいつまでも降り続くが、大嵐はあっという間で、ががつと貪り食すれば、食物が胸につかえ、軽佻浮薄な虚栄は、飽くこ

と知らぬ鵜のように、餌を食いつくせば、すぐに自らを餌食とし始めると警告している。この箇所と言及されている炎や鵜は Richard のイメジャリーであり、小雨は Bullingbrook の比喩として使われている。また、食傷気味の比喩や、自らを食い尽くす鵜のイメジャリーも Shakespeare 後期の劇につながる表現である。この箇所では、イングランドや大地がパラダイス、庭のイメージで捉えられ、代々の王を生み育てた母胎、乳母の比喩でとらえられていて、そのイメジャリーは Bullingbrook のものと一致しており、Richard の敵を悩ませる毒蛇やヒキガエルなどのイメジャリーとは対照をなしている。そして、尊い王たちを生み育てたこの国、世界の隅々まで名声をとどろかせたこの尊い国が貧しい小作地かなにかのように貸し出されており、イングランドも腐った羊皮紙にインクの汚点をたらした書類にしばりつけられていることを、死に臨んで Gaunt は、はっきりと断言し、苦言を呈している。ここでは、“is now bound in with shame, / With inky blots and rotten parchment bonds,” (ll. 63-64) と、法的比喩が用いられている。Gaunt は汚名を背負って、イングランドの汚名が彼の命とともに消えてくれるなら、どんなに幸せかと祈り、次なる王の父として、立派に国を憂いている。

Gaunt は Richard が見舞いにやってくると、最期の息をひきしぼって、次のように王に苦言を呈する。

GAUNT Now He that made me knows I see thee ill.
Ill in myself to see, and in thee, seeing ill.
Thy deathbed is no lesser than thy land,
Wherein thou liest in reputation sick,
And thou, too careless patient as thou art,
Commit'st thy anointed body to the cure
Of those physicians that first wounded thee.
A thousand flatterers sit within thy crown
Whose compass is no bigger than thy head,
And yet engagèd in so small a verge
The waste is no whit lesser than thy land.
Oh, had thy grandsire with a prophet's eye
Seen how his son's son should destroy his sons,
From forth thy reach he would have laid thy shame,
Deposing thee before thou wert possessed,
Which art possessed now to depose thyself.
Why cousin, wert thou regent of the world
It were a shame to let this land by lease,
But for thy world enjoying but this land

Is it not more than shame to shame it so?
Landlord of England art thou now, not king,
Thy state of law is bondslave to the law,
And thou — (2. 1. 93-115)

Gaunt は、死の床にいて、目も悪いが、Richard が自分の王国全体を死の床とし、悪い評判に身をくらし瀕死の状態、王冠の内部には、無数の追従者が巣くって、その及ぼす害は王国全土を荒廃せしめるだろうと警鐘を鳴らしている。この箇所では、最初に王に傷を負わせた張本人を医者にして聖なる体の治療をまかせるという医術の比喩が使われている。こうした医術の比喩は *Macbeth* など後期の劇でも使われている。Gaunt は Richard が国土を貸し出す、不動産の毀損について戒めているが、Richard の心には届かない。この後 Gaunt は Gloucester 暗殺についても Richard を批判して亡くなるが、国王はかえって立腹し、Gaunt の財産をすべて没収し、アイルランド遠征の費用にあて、Bullingbrook の地位と権利を剥奪し、自分の手中におさめてしまう。同場の終わりで、Bullingbrook に心を寄せる貴族たちは、王のこれまでの処置に対して、次のように語っている。

NORTHUMBERLAND Now afore God's 'tis shame such wrongs are borne
In him, a royal prince, and many mo
Of noble blood in this declining land.
The king is not himself, but basely led
By flatterers, and what they will inform
Merely in hate 'gainst any of us all
That will the king severely prosecute
'Gainst us, our lives, our children and our heirs.
ROSS The commons hath he pilled with grievous taxes
And quite lost their hearts. The nobles hath he fined
For ancient quarrels and quite lost their hearts.
WILLOUGHBY And daily new exactions are devised,
As blanks, benevolences, and I wot not what.
But what a God's name doth become of this?
NORTHUMBERLAND Wars hath not wasted it, for warred he hath not,
But basely yielded upon compromise
That which his ancestors achieved with blows.
More hath he spent in peace than they in wars.
ROSS The Earl of Wiltshire hath the ream in farm.
WILLOUGHBY The king grown bankrupt like a broken man. (2. 1. 238-57)

引用の“prosecute” (1. 244)「起訴する」は、疑似法律用語であり、“blanks” (1. 250)「調達許可証」、 “benevolences” (1. 250)「強制納入制度」は税金取り立てに関する Richard のあさましさを印象づける表現となっている。また、Wiltshire 伯は大蔵大臣として、国土を貸し、地代を取り絞り、王にいたっては、身代限りで破産したと、その政治経済面での無能ぶりが、語られている。この劇の中では、こうした経済用語や法律用語が使われて、プロットと絡み合い、政治経済や歴史に敏い知的上流層に訴える台詞となっている。法的縁語についてはさらに、Bullingbrook が York 公にイギリス帰還の理由を説明する件の、“to sue my livery” (2. 3. 128)「相続財産引き渡し」の訴え、“my letters patents give me leave” (2. 3. 129)「それを許可する正当な勅許状」、 “challenge law” (2. 3. 133)「法に訴える」、 “Attorneys” (2. 3. 133)「法廷代理人」、 “my inheritance of free descent” (2. 3. 135)「欠点のない正当な嫡子としての遺産相続」などを挙げることで、これらは、プロットの転換となる要のところで、有効に使われている。Northumberland は、王が阿諛追従の徒にひきまわされる人形同然であり、矮小化された人物に成り下がってしまったことを印象づけている。王の取り巻きが敵意から告げ口すれば、王はそれをたちまち取り上げて、子孫や世継ぎまでも、厳しく起訴し、処刑し、人民には重税を課し、貴族には罰金をとりたてるので、国が破滅しようとしているのを貴族たちは嘆いている。しかし、王の無策に対して落胆する諸侯に Northumberland は “Not so. Even through the hollow eyes of death I spy life peering, but I dare not say / How near the tidings of our comfort is.” (2. 1. 270-72) と述べ、国政が破産寸前と思われる中で新しい展開が起りかけていることを予言している。Northumberland によれば、ブリターニュの港、ポール・ル・ブランから情報が届き、Herford 公 Harry は Brittain 公の援助を得て、わが国の北海岸にまもなく上陸の情報もたらされ、これ以降、プロットは急展開していく。この予言的知らせが、プロットの転換点になっていると考えられる。さらに、予言という観点からは、第2幕第4場、ウェールズの陣営で、Salisbury とウェールズの隊長が登場し、隊長より、10日間待ったのに、王からは何の便りもないので、解散する旨が告げられる。Salisbury はもう1日だけ待つように頼むが、隊長はこの国では、月桂樹が1本残らず枯れてしまい、天には流れ星が飛び交って惑星を脅かし、予言者たちは恐ろしい異変を予言していると自然界の怪奇現象が告げられ、人々はこれを、王の死、または没落の前兆とみなしていることが語られる。Richard のアイルランドからの帰還が1日遅かったために、ウェールズ軍は Richard 王が亡くなったと信じて、逃げ去り、ウェールズ軍の撤退をもたらし、これが、Richard にとって、大きな痛手となる。自然界の怪奇現象についての語りは、予言として、今後のプロットの進展に先見性を与えている。

IV

次にこの作品の特異性のひとつである視覚的でエンブレム的なイメージの分析を行っている。第3幕第4場の York 公爵邸の庭園の場にも、植物によるイメージが使われている。王妃が庭で運命を悲しんでいると、庭師とふたりの徒弟が現れ、庭の手入れをしながら、政治の話をするのを王妃は興味を持ち、侍女と立ち聞きする。

GARDNER Go bind thou up young dangling apiricocks,
Which like unruly children make their sire
Stoop with oppression of their prodigal weight.
Give some supportance to the bending twigs.
Go thou, and like an executioner
Cut off the heads of too-fast-growing sprays
That look too lofty in our commonwealth.
All must be even in our government.
You thus employed, I will go root away
The noisome weeds which without profit suck
The soil's fertility from wholesome flowers. (3. 4. 29-39)

庭師は、ひとりの徒弟にぶらさがっている杏の実を縛り上げるように命令する。まるで手におえない子供のように放蕩の重みで親木をたわませている様は、Richard を揶揄しているのであるが、曲っている枝に突っかい棒をあてがうように言っている。庭師はまた、もうひとりの徒弟に、庭を王国に見立て、死刑執行人の務めを果たし、政治は万事平等でなければいけないので、偉そうにのさばっている伸びすぎた小枝の頭をちよんぎるように命じている。その間に庭師はきれいな花から大地の養分を横取りし、まともなことはしない厄介者の雑草を抜いてくると述べて、アイロニカルな視点を提供しているが、雑草は王の取り巻き連中へのあてこすりと取れる。要領を得ないひとりの徒弟は、さらに次のように庭師にたずねている。

SERVANT Why should we, in the compass of a pale,
Keep law and form and due proportion,
Showing as in a model our firm estate,
When our sea-walled garden, the whole land,
Is full of weeds, her fairest flowers choked up,
Her fruit trees all unpruned, her hedges ruined,

Her knots disordered and her wholesome herbs
Swarming with caterpillars?

GARDNER Hold thy peace.

He that hath suffered this disordered spring
Hath now himself met with the fall of leaf.
The weeds which his broad spreading leaves did shelter,
That seemed in eating him to hold him up,
Are plucked up root and all by Bullingbrook.
I mean the Earl of Wiltshire, Bushy, Green.

SERVANT What, are they dead?

GARDNER They are, and Bullingbrook.

Hath seized the wasteful king. Oh what pity is it
That he had not so trimmed and dressed his land
As we this garden! We at time of year
Do wound the bark, the skin of our fruit trees,
Lest being overproud in sap and blood
With too much riches it confound itself.
Had he done so to great and growing men
They might have lived to bear and he to taste
Their fruits of duty. Superfluous branches
We lop away, that bearing boughs may live.
Had he done so, himself had borne the crown
Which waste of idle hours hath quite thrown down. (3. 4. 39-67)

徒弟は親方にこの狭い囲いの中で、りっぱな国のまねごとをして、なぜ、法や秩序、形式を守らなければいけないのか、海に囲まれた庭であるこの国にはびこるのは、雑草だけで、一番きれいな花は息を止められ、果樹園は剪定されず荒れ放題、垣根は壊され、花壇も無秩序になり、せっかく育った大事な草木も毛虫だらけであるのにと、庭師に問うている。この芝居の中では、法や秩序に関する表現が用いられ、そこに関心がいくような作りになっている。また、決闘により審議を問う際の馬上槍試合の形式、王の廃位に関する形式主義にも重きが置かれる構造になっており、道化が演じていたと考えられる庭師とその徒弟の会話は、知的上流の人々の関心をひく台詞になっていると考えられる。庭師はこの場に及んで、荒れ放題の春がくるにまかせておられたお方は、もう自分が木の葉の散る秋にあっており、大きく広がった葉の下で雨風をしのいでいた雑草は、こやしになるとみせかけて実は彼を食い物にしていたのだが、Wiltshire も Bushy も Green もみんな Bullingbrook に根こそぎにされてしまったことを示唆している。庭師がするように、

ちゃんと国の手入れをしていればよかったのにと、庭師はガーデニングの比喩で **Richard** の国政を批判する。庭師が適当な季節に果樹の皮にわざと傷をつけ、樹液という血を抜かないと、果樹は、増長して育ちすぎ、あっという間に枯れてしまうように、王も成り上がり連中にそうしていたら、忠義の果実を味わっていたのと言いき、庭師が余計な枝を剪定するように、そうなさっていたらまだ、王冠をつけていたのにと、手入れを怠った王の無策を非難している。庭師の噂話により状況を把握した王妃が、胸が張り裂けそうになり進み出て、いつ、どこで、どのようにして、この噂が耳に入ったかを問いただすと、庭師は次のように答えて、王の状況をさらに解説する。

GARDNER Pardon me, madam. Little joy have I
To breathe this news, yet what I say is true.
King Richard he is in the mighty hold
Of Bullingbrook. Their fortunes both are weighed.
In your lord's scale is nothing but himself
And some few vanities that make him light,
But in the balance of great Bullingbrook
Besides himself are all the English peers,
And with that odds he weighs King Richard down.
Post you to London and you'll find it so.
I speak no more than everyone doth know. (3. 4. 81-91)

庭師は **Richard** が **Bullingbrook** に捕らわれていることは誰でも知っている事実であることを告げ、王の秤には王様と、一層軽くするような軽佻浮薄な連中が乗り、**Bullingbrook** の秤皿にはイギリスの貴族が全部乗っており、力ではかなわない様子を秤の比喩で分かりやすく解説する。庭師は王妃にすぐにロンドンに行くことを勧め、王妃が涙を流したこの場所に、嘆かれた王妃のかたみともなる悲しみの花ネンルーダを植えることにし、遠景化をはかっている。

V

さらに、**Richard** 廃位の場合と、彼が所望する鏡を使った演出の場合も視覚的場面であるので、見ていこう。**Bullingbrook** が **Gloucester** 暗殺の謀反について会議を開いているところに、**York** 公から、**Richard** がすすんで王権を譲渡する用意があることが告げられる。**York** 公は **Bullingbrook** を **Lancaster** 公爵と呼び、ついには **Henry 4** 世と声掛けし、王位がまさに継承されようというときに、**Carlisle** が神の代理人として聖油を塗られ、長年王座におられる方がこの場に不在なのに、

裁くことができようかと異議を唱える。もっともな訴えのため、法律重視主義の Bullingbrook は反対できず、Richard を呼び出すことにする。王として君臨していた時の気持ちを脱ぎ捨てないうちに王の前に呼び出された Richard は、York から王位、王冠を Bullingbrook に譲り渡すように言われ、次のように反応する。

RICHARD Give me the crown. Here, cousin, seize the crown,
On this side my hand and on that side thine.
Now is this golden crown like a deep well
That owes two buckets, filling one another,
The emptier ever dancing in the air,
The other down, unseen and full of water.
The bucket, down and full of tears, am I,
Drinking my griefs whilst you mount up on high. (4. 1. 181-97)

王冠を受け取り、Bullingbrook の手に自ら渡す演技をしながら、黄金の王冠を深い井戸に見立て、そこにかかってかわるがわる水を汲み上げる2つの桶のメタファーで今の Richard の気持ちを表していく。一方はからになって常に空中高く躍っており、他方は底に沈んで悲しみを飲み、涙でいっぱい桶で、上昇する Bullingbrook と運命が下降する Richard を王冠という井戸の桶のイメージで解説している。これまでは、水が Bullingbrook のイメージで語られ、Richard は太陽のイメージが使われていたが、運命が逆転してからは、それに伴って、イメージも変容していく。理知的な Bullingbrook は言葉をもてあそぶ Richard に苛立ちをかくせず、王権譲渡の覚悟はあるのかと次のように問いたす。

BULLINGBROOK Are you contented to resign the crown?
RICHARD Are – no. No – aye, for I must nothing be,
Therefore no ‘no’, for I resign to thee.
Now, mark me how I will undo myself.
I give this heavy weight from off my head,
And this unwieldy sceptre from my hand,
The pride of kingly sway from out my heart.
With mine own tears I wash away my balm;
With mine own hands I give away my crown;
With mine own tongue deny my sacred state;
With mine own breath release all duteous oaths.
All pomp and majesty I do forswear;
My manors, rents, revenues I forgo;

My acts, decrees, and statutes I deny.
God pardon all oaths that are broke to me;
God keep all vows unbroke are made to thee.
Make me that nothing have with nothing grieved,
And thou with all pleased that hast all achieved.
Long mayst thou live in Richard's seat to sit,
And soon lie Richard in an earthy pit.
God save King Harry, unkinged Richard says,
And send him many years of sunshine days.
What more remains? (4. 1. 199-220)

王冠譲渡し、王位を譲れば、Richard は王でなくなるだけでなく、身分も名も存在もすべてを失ってしまい、何者でもなくなってしまうことに、王は薄々気づいてくる。自身をここにあるのは、ないも同然の身であるので、王冠譲渡する気はあると言えないし、ないと言えばあとに巻くようなことを言うが、そのような価値のない者なので、譲るとしている。自らの手から、頭から、王冠と王笏、心から王権の誇りを譲り渡すとし、領地も地代も収入も捨て、法令も布告も法規もすべて、白紙に戻すと言っており、ここでも法用語が使われている。Richard は自作自演の演技の中に埋没し、王権とともに自らのアイデンティティーが何者でもないものになってしまうことを、王権とはそういうものであることを痛感し始めている。他になすべきことを問いただした Richard に Northumberland は、なすべきは、あとひとつだけと言い、王と廷臣たちが国の秩序と福祉に反して犯してきた嘆かわしい罪状とその弾劾文を読むように要求すると、自分が作りあげた愚かな行為をりっぱな人々の前で読まねばならないとしたら、恥ずかしいとは思わないのかと Richard は言い、目は涙でいっぱい、読もうにも見えないと言い張り、これまでとは違って、自身に水のメタファーを使っている。さらに、Richard は名も称号も洗礼名も奪われてしまい、今となって、呼ぶべき名前を持たぬことを嘆き、次のように言って鏡を所望する。

Good king, great king, and yet not greatly good,
And if my word be sterling yet in England
Let it command a mirror hither straight
That it may show me what a face I have
Since it is bankrupt of his majesty. (4. 1. 262-66)

“sterling” (l. 263) は “of current value” の意味で、貨幣経済の比喩であるが、貨幣と同じように、王の言葉も信用を失うと、流通してゆかず、パワーを失っていく。Richard はようやく、うまく

取り入る術を得て、自分の言葉がまだ、イギリスで流通するなら、すぐここに鏡を持ってこさせてはもらえまいかと、Bullingbrook に鏡を所望する。“bankrupt” (l. 266) もまた、貨幣経済の比喩であるが、王の威厳の破産した顔を自ら見たいと願い出ている。この作品の中では、貨幣経済の比喩が使われ、それは、王妃の悲しみのふくれるイメージと酷似して、みじめな状態の中で好ましからざるものが倍増するイメージで使われていて、こうしたことに敏い宮廷人や知的上流に響く台詞となっていると考えられる。従者が所望した鏡を持って登場すると、Richard は王の威厳の破産した顔について次のように解説する。

RICHARD

Give me that glass and therein will I read.
No deeper wrinkles yet? Hath sorrow struck
So many blows upon this face of mine
And made no deeper wounds? Oh flattering glass,
Like to my followers in prosperity
Thou dost beguile me. Was this face the face
That every day under his household roof
Did keep ten thousand men? Was this the face
That like the sun did make beholders wink?
Is this the face which faced so many follies,
That was at last outfaced by Bullingbrook?
A brittle glory shineth in this face.
As brittle as the glory is the face,

[*Smashes the glass.*]

For there it is, cracked in an hundred shivers.
Mark, silent king, the moral of this sport,
How soon my sorrow hath destroyed my face.

BULLINGBROOK The shadow of your sorrow hath destroyed
The shadow of your face. (4. 1. 275-91)

鏡を見て Richard は、あれ程打撃を受けたのに深い皺が刻まれていないことに苛立ち、自身の鏡に映しだされた顔をかつての太陽の比喩を使い、太陽のように仰ぎ見るものを常にまぶしがらせた顔、はかない栄光の輝く顔と捉え、鏡をおべっか使いの家来同様、自分をだますもののみなしている。鏡を叩き割り、はかなくも粉々に砕け散った様をおしだまって見ている Bullingbrook に演劇のメタファーを使い、この見世物の意味が分かるかと問い、悲しみが顔をつぶすのは一瞬だと諭すと、Bullingbrook に、悲嘆の苦しさがあなたの顔のありもしない影を打ち砕いたにすぎ

ないと言いつ返されてしまう。言葉が流通しなくなってきた Richard は弾劾文を読むことはせず、Bullingbrook の顔の見えないところに行きたいと願いつ出て、ロンドン塔に送還されることになる。この場で、王 Richard が罪状と弾劾文を読まなかつたことが、後々しこりとなり、Carlisle が “The woe’s to come. The children yet unborn / Shall feel this day as sharp to them as thorn.” (4. 1. 321-22) と予言しているように、薔薇戦争の起こる発端ともなつてしまう。この痛ましい見世物を見て、Westminster 修道院長、Carlisle、Aumerle は Bullingbrook に対して反乱を起こすきっかけとなり、Bullingbrook は次の水曜日を即位戴冠式に定める運びとなる。Bullingbrook は冷静で理知的な、現実的で Machiavelli 的な政治家であり、Octavius Caesar に近い存在であり、時至れば、敢然として立ちあがる勇気と法律的感觉・洞察力を兼ね備えた頭脳を持っている。一方、Richard は、古いヒエラルキーと神が王を守ってくれると半ばまで確信しており、廃位させられそうになつても、言葉を弄び、夢想的で感情的な自作自演の演技に没頭する俳優であり、気紛れで政治的力量はなく、無慈悲な一面を持ち、常に不安で動揺し、廃位とともに自らのアイデンティティーさえ失つてしまう。Mowbray は神と王に忠実で忠義を重んじるが、激しやすい気性の廷臣・騎士であり、その対照人物 Exton は Bullingbrook の意図を推しはかり、国王弑逆をあてて行おうしろめたい腹黒い一面を持ち、それは Bullingbrook の政治的な闇の部分を示し、共有している。

VI

この章では、今まで論じてきた点の概括と補遺を行い、この劇の特異性と演劇的環境からどのようなことが考察できるかをまとめてゆきたい。*King Richard II* は、多くのスピーチ、弁論や庭師の噂話などから、プロットが進み、劇冒頭の決闘承認に至る討論や、馬上槍試合の儀式性等が際立っている特異な劇である。また、Richard や、Bullingbrook、Mowbray の性格をしるすのに四元素や古生理学気質を示す要素が使われ、食傷や、病気、動植物のイメジャリーやエンブレム、経済用語、法律用語などが、プロットの進展と対照的な登場人物の配置を示すのに効果的に使われている。劇構造としては、転換点が第2幕第4場のウェールズ軍の撤退にあり、予言や予示の効果もあり、Richard の王冠という井戸の中の2つの桶の比喩で示されるように、一方の運命が上昇すると、他方の桶は下降し、それによってイメジャリーも逆転し、上昇するものに吸収され統括されていく構造になっている。Bradbrook もスタイルの変化は構造観念の外面的視覚的な変化のサインであると言っており、それぞれの登場人物は機能だけでなく、気質や語句表

現においても対照的に配置されていると言及している。¹⁰ Richard は芝居開始には、太陽（火）とみごとな言葉（風）のイメージラリーで現されているが、次第に涙（水）から墓（地）へと移行していく。Richard の場合は、次のように太陽神の子 Phaëton が馬を御せずに墜落するイメージで、語られている。

RICHARD Down, down I come, like glistening Phaëton,
Wanting the manage of unruly jades.
In the base court? Base court where kings grow base
To come at traitors' calls and do them grace!
In the base court come down. Down court, down king,
For night owls shriek where mounting larks should sing.

[Richard descends] (3. 3. 178-83)

Richard は Bullingbrook と Northumberland に王自らが下の庭に降りていくことを求められている屈辱的な場面であるが、太陽神の子が馬車を御せずに墜落していく比喻と廷臣や政治を統治できずに王がその地位を下降していくことを自らアイロニカルに喩え何度も下の庭に降りていくことを強調している。太陽は、York 王家の徽章であるとともに、Richard 自らの選んだ徽章でもある。¹¹ 己が無策を Phaëton の喩えで述べた後、揚げヒバリが歌うべき時に、夜のフクロウが鳴くのと、王が卑しい裁きの庭に降りるのだと、はからずも口にしており、フクロウの鳴き声は *Macbeth* にもあるとおり、不吉な死と災難の前兆でもあり、Richard の墓（地）への変容を暗示させるイメージラリーになっており、これは、後期の悲劇でも使われている。¹² Bullingbrook が即位の日に乗ってロンドンの通りを行列した栗毛のバーバリーは Richard のお気に入りの馬であり、馬は Stanley Wells が指摘するように、Richard が “I was not made a horse / And yet I bear a burthen like an ass, / Spurred, galled and tired by jauncing Bullingbrook.” (5. 5. 92-94) と自らを例えるシンボルであるが、ここでも、王として生まれた者がロバのように酷使されているみじめな様がアイロニカルに表現されていて、動物の比喻が自虐的に使われており、諷刺喜劇の要素が見られると言えよう。¹³ 揚げヒバリと夜のフクロウが対比されているように、これと対照的に、Bullingbrook は烈火（火）と荒海（水）、追放（地）から白鷹が舞い上がる高みと風（空気）そして太陽（火）へと変容するイメージラリーで現され、王へと昇り詰めていく。ふたりの王は性格の違いは対照的で、イメージラリーを使ってその相違が示されているが、王冠に付随する暗澹たる部分は受け継ぎ、Richard が Mowbray に与えた負の部分を Bullingbrook は Exton に対して引継ぎ、Exton を永久追放している。決闘の制止を行う為政者の態度としても、Bullingbrook

は王になろうという段階で、同様の対応を Richard から引き継いでいて、対照的な配置になっている。York の通告によって制されるものの、Bullingbrook への謀反が企てられるプロットの進展も同様に、シメトリカルな構造である。

King Richard II は1597年に四折本 (Q1) で初めて出版されたが、王の廃位の場面は外され、Elizabeth 女王が亡くなってから後に出版された1608年の四折本 (Q4) で、議会の場と Richard 王廃位の場を増補して収録された。¹⁴ Richard 2世の廃位は、この作品の創作年代と考えられる1590年代には、特別な政治的関心事を引き起こしていた。晩年の女王に後継者がいないことや、女王の不安定な晩年の治世が寵臣に取り巻かれていた Richard 2世になぞらえていたこともあり、これらは政治問題と関わり、女王と Essex 伯に関心が集まった。1601年に反乱をおこした Essex 伯の先祖は Edward 3世の息子 Gloucester であり、Gloucester は Richard 2世に暗殺されていることから、系譜的には、Bullingbrook の立ち位置にある。¹⁵ Essex の支持者は宮内大臣一座に *King Richard II* の上演を謀反の前日に頼み、演劇の扇動の効果を期待して氣勢を上げたと考えられ、宮内大臣一座はさしたる咎めはなかったが、女王が自らを Richard 2世になぞらえたエピソードもあり、政治的に危険な含みのある作品で、廃位の場面は上演されていたにもかかわらず、検閲のためにカットを施す必要があった。¹⁶

また、この作品の特異性のひとつは、弁論が重視されていることであるが、王位についての Gaunt の演説が、1600年に出版された *England's Parnassus* に収録されている。¹⁷ 1600年前後には、諷刺的な作品が目立つようになってくるが、この作品との関係としては、どうであるのか。*King Richard II* は1597年8月出版登録簿に記載されたが、同年『犬の島』事件が起こり、作品が扇動的であるとして Ben Jonson などの劇作家や詩人が投獄され、演劇全般が禁止となった。¹⁸ 1597年は政局や演劇界においても、社会を騒然とさせた変動の年で、そのきっかけになったのが『犬の島』事件であると考えられる。女王と政府当局は *Richard II*、*Henry IV*、さらに海軍大臣一座や宮内大臣一座の劇に見られる個人的、政治的諷刺に苛立ちを感じており、これは女王と枢密院の避けようのない感情的爆発を深刻化させた最後の事件とされている。¹⁹

Thomas Nash の諷刺劇、*The Isle of Dogs* 自体は、Pembroke 一家が役者を使い、古い恨みをはらしたもので、個人的標的は Essex 伯であるとされているが、1597年7月末にこの作品が上演されると、ポーランド大使に対する中傷を含んだ政治諷刺がたたって、ロンドン中の劇場が一時封鎖される事態を招いたいわくつきの作品である。²⁰ こうした劇場戦争や、Essex が王の系譜に属する Gloucester の子孫であることも考慮に入れると、Essex 伯の支持者が *King Richard II* の上演を反乱前日に依頼したことは、作品内部に政治的諷刺喜劇的なあてこみがあることが否めな

いことを示唆している。

The Isle of Dogs が上演された1597年ごろから上演においても出版においても諷刺的な作品が目立つようになり、これは少年劇団の影響もあったと考えられている。諷刺喜劇はセント・ポール少年劇団によって始められ、1597年から1607年にかけて流行し、神話学に諷刺的な辛辣さを加えたもので、宮廷の嗜好に合い、興業収入が公衆劇場の6倍で、宮廷や法曹学院など知的上流層に大人気であった。当然、個人的、社会的、文学的および倫理上の冷笑的な諷刺の要素が見られるようになり、廃位させられる Richard がフリント城の下の庭にいる Bullingbrook の前に呼び出された際に、Bullingbrook が形式上、礼を尽くして跪くのを Bullingbrook の王権への野心を暴いて制する言葉など、*King Richard II* においても、これに類似した冷笑的でアイロニカルは台詞が見受けられる。

S. T. Coleridge は *King Richard II* を愛国心を喚起する純粋な歴史劇として批評し、Stanley Wells はこの作品を Shakespeare の全作品の中でも最も純粋な抒情詩とみなしている。²¹ A. P. Rossiter はこの劇をアリストテレスの単純な悲劇で筋の急展開も認知もなく、劣ったものとみなし、Shakespeare の落胆させる歴史劇よりは興味深い、曖昧で不明瞭な一種の悲劇的ドラマと評価している。²² また、Rossiter は、この作品には多くの挫折感のある軽妙なアイロニーがあり、そのように悲劇を曖昧にしているのは、一種の人や物における出来事の愚かしさで、それは運命よりも不確かで破滅させるものと述べているが、この作品の中に流れる軽妙なアイロニーはむしろ、諷刺喜劇的な作風や演劇環境的要因によるものではないのか。²³ Larry S. Champion は *King Richard II* は、歴史劇というより、概念的に悲劇に近いことを認めなければならないと述べているが、筆者の考えもこれに近い。²⁴

演劇的環境からみると、宮内大臣一座は、『犬の島』事件をきっかけに、ライバル劇団の統廃合や劇作家の投獄、劇場閉鎖などもあったことから、より確実に収入が得られる劇作を目指す必要があったのではないかと考えられる。Bullingbrook が Aumerle を許す場における跪く York 伯爵夫人に対する喜劇的な要素、傷心の Richard の冷笑的な台詞など、Shakespeare は1597年、*King Richard II* において、歴史を扱った劇ではあったが、当時流行していた諷刺喜劇の要素を取り入れ、法的縁語、経済用語、馬上槍試合における儀式や手順の重視など、知的上流層をターゲットとしたきわめて様式性の高い作風の悲劇に仕上げたと考えられる。廃位する王が自らの顔を鏡に映す技法やメタ演劇の要素を取り入れ、死を目前にした王の人生観が演劇的メタファーで語られプロットが展開していく筋立てなども、芝居好きの知的上流層を惹きつける方策ではないかと考えられる。Shakespeare はこの作品において、四元素や気質に結びついたイメージアリーを対照的

な登場人物の配置にからませ、動植物のあてこみやエンブレム、庭を国に見立てた図像学的な台詞、相手を揶揄する台詞や、弁論性など、流行の諷刺喜劇的要素を作品に盛り込んだ。*King Richard II*において Shakespeare は、*The Isle of Dogs* のように政治目的や個人攻撃ではなく、当時流行の諷刺喜劇の要素を作品の色調として取り込むことで、後期の悲劇の萌芽となるべく、廃位された王 Richard の歴史を扱った悲劇を描き、知的上流階層の観客の獲得を目指したのである。

NOTES

-
- ¹ M.C. Bradbrook, "Tragical-Historical: *Richard II*," in *Shakespeare Richard II: A Casebook*, ed. Nicholas Brooke (London: Macmillan, 1973), p. 152.
 - ² S. Schoenbaum, "'Richard II' and the Realities of Power," *Shakespeare Survey*, 28 (1975), p. 2.
 - ³ Cf. Bradbrook, p. 152; Stanley Wells (ed.), *The New Penguin Shakespeare: Richard II* (London: Penguin Books, 1969), p. 10.
 - ⁴ 本稿での *King Richard II* の引用は全て、Andrew Gurr (ed.), *The New Cambridge Shakespeare: King Richard II* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1984) を用いた。
 - ⁵ Robert Ornstein, *A Kingdom for a Stage: The Achievement of Shakespeare's History Plays* (Cambridge: Harvard U. P., 1972), p. 105.
 - ⁶ Kenneth Muir (ed.), *The Arden Shakespeare: Macbeth* (London: Methuen, 1951; rpt. 1997), pp. 69-70, II. iv. 1-20.
 - ⁷ Cf. Ornstein, p.105.
 - ⁸ Gurr, *The New Cambridge Shakespeare: King Richard II*, p. 62, notes, l. 109, p. 60, l. 74, p. 24; Wells, p. 167, notes, l. 109.
 - ⁹ Gurr, *The New Cambridge Shakespeare: King Richard II*, p. 64, l. 174.
 - ¹⁰ Cf. Bradbrook, p. 153.
 - ¹¹ Cf. Peter Ure (ed.), *The Arden Shakespeare: King Richard II* (London: Methuen, 1956), p. 115, notes, l. 178; Charles R. Forker (ed.), *The Arden Shakespeare: King Richard II* (London: Thomson Learning, 2002), p. 355, ll. 178-79.
 - ¹² Cf. Forker, p. 356, notes, l. 183; Wells, pp. 11-14.
 - ¹³ Wells, p. 37.

- ¹⁴ A. R. Humphreys, *Shakespeare: Richard II* (London: Edward Arnold, 1967), p. 11.
- ¹⁵ Cf. Gurr, *The New Cambridge Shakespeare: King Richard II*, p. 6.
- ¹⁶ Cf. Gurr, *The New Cambridge Shakespeare: King Richard II*, p. 7; Humphreys, p. 12.
- ¹⁷ Humphreys, p. 12.
- ¹⁸ Cf. Andrew Gurr, *The Shakespearean Stage 1574~1642* (Cambridge: Cambridge U. P. 1992), pp. 42-43; E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, III, (Oxford: Oxford U. P., 1923), p. 455; Gurr, *The New Cambridge Shakespeare: King Richard II*, p. 10.
- ¹⁹ 拙論、「*King Edward III* における演劇的環境と特異性」、『埼玉女子短期大学研究紀要』第19号 (2008年3月)、180-81。
- ²⁰ Robert Boies Sharpe, *The Real War of the Theatres: Shakespeare's Fellows in Rivalry with the Admiral's Men, 1594-1603 Repertories, Devices, and Types* (Boston: Modern Language Association of America, 1935), pp. 108-109.
- ²¹ S. T. Coleridge, "Earlier Critics of Richard II," in *Shakespeare Richard II: A Casebook*, ed. Nicholas Brooke (London: Macmillan, 1973), pp. 27-29; Wells, pp. 7-10.
- ²² A. P. Rossiter, "Richard II," in *Angel with Horns and Other Shakespeare Lectures* ed. Graham Storey (London: Longmans, 1961), pp. 29, 39.
- ²³ Rossiter, p. 37.
- ²⁴ Larry S. Champion, *Perspective in Shakespeare's English Histories* (Athens: Univ. of Georgia Press, 1980), p. 37.